



ICT 海外ボランティア会会報

No. 19 (旧、NTTOBSV 会会報)

2010年8月24日(火)

Home page : <http://sv.nttob.org/>

e-mail : sv@info.nttob.org

目次

- ◆巻頭言 会の拡充と名称変更について
当会顧問 石井 孝氏
幹事・事務局長 加藤 隆氏

- ◆本会入会者リレー寄稿 JOCV からショップの店主へ
JOCVOG JOCV スリランカ 今井 奈保子氏

- ◆現地たより
SV 活動報告 トンガからの報告 鈴木 弘道氏

- ◆海外派遣者の支援アクションプランについて
人材育成促進部長 山下 満男氏

- ◆本会報に対するご意見のお願い
事務局 編集担当

巻頭言 会の拡充と名称変更について

NTT OB シニア海外ボランティア (SV) 会の拡充と名称変更について

2010年8月24日

顧問 石井 孝

幹事 加藤 隆

1. NTT OB SV会の現状

(1) 体制と人数

2008年8月26日に発足した本会は、やがて3周年目を迎えようとしております。この間皆様のご尽力とご支援により、規模も内容も充実して参りました。現在は特別顧問1名、顧問5名、幹事12名（内1名は顧問兼務）、会員55名で合計71名になり、なお順調に増加しております。そのほかご支援いただく、いわゆる応援団は159名の方をお願いしております。（以上、本年8月）

特別顧問には宮村 智様（元NTT常務及び元駐ケニア大使）にご就任いただき、顧問は主にNTT及びJICAの幹部の方をお願いいたしております。幹事はSV経験者及び現在SVとして活躍中の方（現在4名）です。その中にはNTT OBでない方も含まれております。

会員はSVに関心を持ちで将来SVとして活動なさる可能性のある方です。会員中30名はNTT現職（NTTを一旦退職されてNTT関連会に再就職された方を除く）の方です。その多くは青年海外協力隊（JOCV）のOB・OGですが、その内現在JOCVとして活躍中の方は5名です。

(2) 活動内容

今までは、本会の設立趣旨に基づき活動をいたしております。すなわちシニア海外ボランティアの体験を生かして、NTT OB等の皆さんに情報を提供し、ボランティア活動への参加をお勧めします。また現在世界中の各地で活動中の方々の支援をしております。

この趣旨を踏まえ、具体的にはホームページ（HP）の開設・運用と会報の発行等を行っております。（HPアドレス <http://sv.nttob.org>）

HPは本会発足と同時に幹事の山崎義行氏（広報部長）の尽力で開設されております。内容は日頃ご覧いただいていると思いますが、閲覧者はコンスタントに一日5人強のペースで増加しております。（8月下旬までの閲覧者数；5100名）

また、会報は今号がNo. 19ですが、巻頭言・最近の活動・現地活動便り・リレー寄稿など充実してきていると思われれます。編集には幹事の村上勝臣氏（報道部長）に尽力いただいております。

そしてHPや会報を通して、JICAの年2回のSV募集に関する情報なども提供しております。正確な数は入手出来ませんが、NTT OBの応募者数も増加傾向にあるようです。またJICA募集説明会への協力や、講演会や刊行物を通して、折に触れて本会のPRもいたしております。

同時に本会会員のSV派遣時の壮行会や帰国時の報告会を開催するほか、NTTの青年海外協力隊員（JOCV）の壮行会にも参加してコミュニケーションを図っております。

2. NTT OB SV会の動向

現在まで2年間の活動を通して、新しい動きが2・3あります。

その1つは前述しましたが、会員にNTT現職の方が30名もいることです。その多くは青年海外協力隊（JOCV）のOB・OGですが、このことは事前に予想できませんでした。またSV経験者の中にはJOCVのOBも多いのでJOCVのOB・OGともタイアップして進めるのが自然の流

れと感じております。

もう1つは、広く電気通信関連のSV経験者にはNTT関係者のみならずICT関連会社のOBの方も多く、現在当会にも大手通信メーカーのOBの方が幹事になられております。

その他の動向としては、現在途上国で活躍しているSVのみならずJOCVへのバックアップ体制を整えようとする動きや、現在わが国ICT産業の国際競争力の減退を考慮し、途上国で活躍できる人材育成に幾分ながら寄与したいとの動きがあります。

3. NTT OB SV会の動向への対応

以上のことから、本会の活動目的を拡充すると共に、本会入会者の構成者をNTT OBに限らず範囲を拡げ、NTT現職やNTT関連以外のICTを活用した分野（情報通信、通信放送、電子政府、教育、医療、環境、防災分野等）にも広く門戸を開放すべく、本日（2010年8月24日）付けで、当会の名称を官村特別顧問のご提案を念頭に置き、「NTT OB SV会」から「ICT海外ボランティア会」とし、本会の目的を「JICAの海外ボランティア体験を生かし、広くわが国ICT関連企業のOB・OGや現職の方々に情報を提供し、ボランティア活動への参加をお勧めします。また現在世界の各地でボランティアとして活躍中の方々に体系的に支援をいたします。同時にこれ等を通して、将来海外で活動できる人材育成に寄与いたします。」とし、その推進役中心として会員の山下満男氏を人材育成促進部長になっていただいで進めたいと考えております。

やがて当会は発足3年目を迎えます。この期に活動を時代の流れを先取りして一層強化し、会の名称をそれにふさわしく変更いたします。

今後ともよろしくご支援・ご指導をいただきますようお願いいたします。 （以上）

本会入会者リレー寄稿 第6回 ボランティア活動を振り返る

「ボランティア活動を振り返って」

メキシコ 横田 悦男

・・・再びメキシコへ着任・・・

1. プロローグ・・・応募の動機など

(独)国際協力機構(JICA)の、海外シニアボランティア活動に幸いにも合格して、再度メキシコへ派遣されたが、振り返れば、最初のシニアボランティア(SV)の応募時には、いろいろな思いが胸中を駆け巡った。

現役時代は決して、順風満帆の会社生活を送ったわけではなかったが、それでも第二の就職先で、そのまま慣れた仕事を続けていれば、十分とはいえないまでも、ある程度の収入は保証され、大過なく社会生活を終わったかも知れない。しかし過去には多く人から色々なことを教えられ、自分でも勉強した。これをそのまま活用することなく朽ちさせては、これもまた悔いが残るだろう。等々。

最後には、自分を育ててくれた社会に少しでも恩返しするのが、私の最終目標そのものになり、その中の選択肢として、「自分は中南米でボランティア活動をするのだ」という、思いを実現すべく、JICAの試験を受けた。

書類審査、語学試験、外国語面接、身体検査、最終面接試験など、ボランティア活動への応募という、こちら側の主体性による参加とは思えないほどのハードな試練を幸いにも通過して、会社を辞しミッションを始めた。感謝すべきは、この活動への参加に当たっては、会社も家族も最後には私のわがままを許してくれたことである。

長い会社生活の中では、“自分流の生き方で過ごす”、これは一見簡単なようで、実際に実行するのはなかなか難しく、命じられるままに、仕事内容も変わり、ポジションなどを変わってきたが、個人的なことを除いて自分の出处進退を自分で決めたのは、このSV参加という決断が初めてだろう。

この自分の強い意志による参加というのは、一つのキーワードとして重要で、SV応募の理由は個人によって色々あろうが、とにかく動機が弱いといずれの時期に、挫折感を味わうことになると思う。

2. 配属先の状況・・・業務の内容など

派遣期間：「2009年1月8日～2011年1月7日」、「ISO基準に基づく研究機関に対する品質管理体制の構築」というテーマが、私がボランティア活動としてのミッションで、配属先はメ

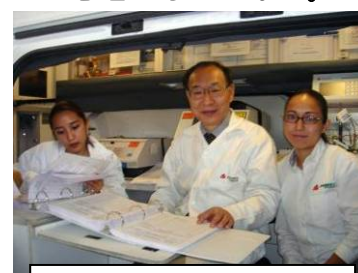


キシコ適合性認定協会 (entidad mexicana de acreditación) (通称 ema) という、ISOの認定機関である。

約80名の社員の内、女性が約60%の比率で、全体のトップは女性、所属する部門のトップ(部長)(当時)も女性、当方の仕事の関係上、他部門との調整役を担ってくれる人も女性で、さらに管理職層も女性の比率が高く、日本に居たときの私の専門分野での、泥臭い男性社会で経験した職場とは違う緊張感がある。

それはさておき、いつものことながら、物事を始めるにあたっては、何から始めて良いかわからず頭を悩ますもので、要請内容と着任時の相手先の要求内容の相違、それに伴う自分の専門領域との乖離等。これに対しては相手と相談し、自分主導でことを進めるしかない。

具体的な業務は、要請に基づき、週3日間、一日約5時間、述べ1コースあたり15時間を越える講義を、100ページを超える自作のスペイン語で書いた教材を使って、演習を交えながら、メキシコでも有名な大学の研究者や国営の研究所の研究員を相手に、カウンターパートも殆ど付かない中で、自分ひとりで行ってきたり、時により個別に指導を実施した。



博士なども混ざった高学歴者を相手なので、緊張を強いられる講義で、ゴルフに例えると、ダフリ(絶句)、チョロ(つかえつかえ)、トップ(上滑り)、パット決まらず(押さえどころの悪さ)の、お馴染みのゴルフスコア崩しスタイルと似た様子の、オンパレードだったと思っている。

3. カルチャーの違いでの葛藤・・・三大禁句言葉など

ラテン民族が有している自由闊達的な性格と、過去の歴史的な感情から来る内面的な反発心、第三世界のリーダーとして活躍し、中南米での盟主を密かに自認しているため、相手の思惑など気にしない、強烈な自己主張。ときにはこれらが混ざり合った、複雑な感情等々。

滞在国の国民性をあまねく語るのは難しいが、私の感じている彼らの性格の一面性である。中南米では、「アミーゴ (友達)」という言葉と、「シンパティコ (感じが良い)」という言葉は、辞書に載っている語感から直訳的に感ずる以上に重く、これは社会生活上重要な言葉の一つだと思う。

彼らを見下げるような態度を取る人は、概して評判が悪くなり、シンパティコの対極にある、「アンティパティコ (感じが悪い)」と彼らに判断されれば、当然アミーゴにはならない。この感覚の差は歴然で、生活が味気ないものとなったり、業務遂行上都合が悪くなる可能性がある。

相手に、「教える」などと言う大上段から構えた大層なことよりも、相手から何を聞かれても、即座に答えられるように事前準備を十分に行い、聴講生と一緒に考える雰囲気を作ろうと努力しながら、良好な人間関係を保とうと心がけるしかない。

少しは自己自慢を交え、しかも矛盾の論理だが、謙譲の美德を兼ね備え、礼儀正しく話すよう心がけようと思ったのである。まさに、論語に言う、「和して同ぜず」の言葉そのものである。

外国から来ている専門家だから、何でも知っているだろうとの勝手な推測などで、私の専門分野以外の質問を受けたり、先進諸国への研修などで行った人などは、一般的な知識にはある程度精通していて、当方を値踏みするため、あるいは知識の再確認の意味で質問をしてくる。

このときの対応の仕方によって、自分の評価に重大な影響を及ぼす。私は、中南米の業務実施における、「3大禁句」と密か称している、「それは知りません。そのことはできません。すみません」と言う言葉だが、これを言えば少なくとも専門家としての評価が下がる。

専門馬鹿に陥らないように、日頃から幅広く色々なことを勉強しておくことも大事で、講義の中では質問により、自分の担当テーマの講義以外に、他の専門家の領域にかかわることも相当説明した。

今回のミッションのような、経営管理的な内容の技術を教える場合、実技を伴った指導科目と違って、「俺のやり方を見て覚えろ」の流儀を実施できず、身振り手振りだけでは、意志の伝達と言う面からはとても

覚束ない。すべて言葉と文字で意志の伝達を必要とするので、ある程度の現地語の会話力は必須である。

過去に経験した、JICA 派遣の専門家ときは、送り出した側の後ろ盾があり、分からない事項は関係者に問い合わせることで、解決できたが、SV という自分の意志で参加したミッションには、相談する相手もおらず一人悩むことになる。

しかも、大学の教官相手、いわゆる教育のプロを相手に教えると言うことは、予期せぬ問題が生じたこともあった。ISO の条文解釈だけの講義では退屈すると思い、ある大学で、品質管



ミッションの一例(グループ討議による演習)



各大学からの感謝状および講義実績証明書など

理に関連する業務分析手法を演習に取り入れた。

当地で誰でも知っている料理方法を例にして、演習をした際、一人の男性受講者から、「なぜ我々が料理方法を勉強しなければならないのか」と、講義の中で抗議？を受けた。

一般論として誰でもわかるように、あえて料理方法を共通話題として使ったのだが、彼には不満だったのだろう。次回からこのことを事前に断りを入れてから演習に入ったのは言うまでもない。

このあたりの対処を間違えると、講義終了後の評価測定の為の、アンケートなどで強烈なコメントをくらう。以上述べたことを別の言葉で言い換えると、技術を教わる彼ら自身が、我々個・個人の業績評価を、絶えずしているようなものである。

業績評価に情実がなく、彼らなりの感覚にしたがって、対象相手の実力を判断しているだけに当人にとっては厳しいが、それだけに本気で業務に取り込んでいる者にとっては、今の活動は緊張することは多いものの、やりがいがある仕事というものだろう。

4. エピローグ・・・思うこと

スペイン語の諺に、「Si el final concluye bien, todo ha estado bien.」(シー エル フィナル

コンクルーエ ビエン トード ア エスタード ビエンと発音し、直訳は、「もし最後が上手く終われば、すべてが良かったことだ」という意味である)。日本語では有終の美を飾るなどの言葉が思い起こされる。

この諺の意味を考えると、私はここメキシコで、一体何をしてきたらどうかと、少しばかり不安感が頭を過ぎる。日本人の評判を落とさないためにも、「それは知りません。そのことはできません。すみません」の3大禁句は使わず、配属先の要請には最大限応えてきたと自負しているが、私のミッションは成果という面では、すぐには現れてこないが、派遣した側としては当然成果を求めてくるし、派遣先もどう評価しているかわからない。

しかし自分自身の側に立って考えると、男は人生を過ごす間に、何処かで一度ならず冒険してみたいと考える人も多いと思うが、私にとって現在の自らの意志による海外勤務は、そのたった一度の冒険だったのかも知れないし、また自分に何が欠けているかを、はっきり認識する機会でもあったのだと思う。

この仕事を終えるにあたって思うことは、客観的条件から次のSVに挑戦する機会はまだ無いが、いつの日か自分が過去に仕事をして来た国々を再度訪問し、滞在していた当時と比較して、どの様に変化しているか、自分の過去の仕事の証を、自分の目で確かめて見たいということである。

そのときこそ自分の成果が問われるときだと思っている。

海外青年協力隊員からフェアトレードショップの店主となって

2010年8月 JOCV スリランカ OV 今井奈保子

NTTOBSV 会報 15 号のリレー寄稿を書かれた山下さんから貴会を紹介していただき、今回新会員として寄稿させていただきます。山下さんとは NTT のスリランカテレコムプロジェクトでごいっしょさせていただきました。山下さんが JTEC に在籍中は、出張でいらしたサモアで再会を果たすことができました。その時、私は調整員として JICA サモア事務所で仕事をさせていただけにいました。

2000年10月に NTT コミュニケーションズを退職後も海外で仕事をさせていただく機会を得、通算 15 年ほど海外を拠点にしておりましたが、今年 2 月、地元静岡に戻り、この 7 月より静岡市内でフェアトレードショップを営んでおります。協力隊や業務などで海外に滞在して得た経験から、ライフワークとして世界各地の方々と相互交流していきたいと思い、そのためにフェアトレードを選択しました。本寄稿では、フェアトレードを選択したきっかけや経緯などを書かせていただきます。

入社 5 年目に

北海道出張中、札幌から小樽への移動電車の中で目に留まった協力隊募集のポスター。なんとなく気になり、特に強い動機もないまま、技術のない私でも何かできることがないものかと模索を始めたのは NTT に入社して 5 年目でした。なぜ協力隊に行ってみたいと思ったのかは、未だにはっきりとはわかりませんが、その時、なぜか「あっ、これだ！」と思ったのです。社内報で事務系の社員でもボランティア休暇を取得して青年海外協力隊に参加できると知り、まだ協力隊の受験もしていないのに、「協力隊に参加したいのですが・・・」と当時の上司に唐突に切り出しました。当時は、電話事業サポート本部に所属しており、1ヶ月の約半分は支社や支店などへのお出張、オフィスでの仕事は深夜に及ぶこともある非常に繁忙している部署であったにも関わらず、上司、先輩、同僚みんなが快く送り出してくれました。

順調だったのに・・・

1993年12月、平成5年度2次隊で村落開発普及員としてスリランカに派遣されました。スリランカの村での生活は、東京でのOL生活とは正反対でしたが、とても快適で充実したものでした。職種がら、活動を自分で組み立てることができたおかげで、勝手に“Small Income Project”を立ち上げ、村の青年たちと建電工事を請け負ったり、家庭婦人や未就業の若い女性たちを対象にパッチワーク教室を開いたり、パッチワーク作品を商品化し販売したり・・・とさまざまな活動を村人たちといっしょに行いました。特にパッチワークの商品化はとても成果が上がり、村の女性たちは、家の床を土からコンクリートにしたり、窓にガラスを入れたりなど自ら稼いだお金を有効に活用していました。2週間に一度、商品を卸しに村からスリランカ最大都市のコロンボまで行商に通っていました。ところが、半年ほ

ど経ったある日、それまで私たちの商品を買入れてくれていた商店の店主からたった一言「もういらないよ」と言われ、状況は一転してしまいました。私たちの商品がその店主により複製され、工場で大量生産されるようになっていたのです。村人たちはとても落胆しましたが、工場では生産できないような商品を作り出そうと再び商品作り、マーケティングを行い、スリランカを離れる当日まで村人たちといっしょに活動をしました。

継続されていた！

1996年1月にNTTに復職し、広報関係の業務に就かせていただいている間も、講演会などで協力隊の経験を日本の皆さんに伝える機会を得、私の中では協力隊の活動が継続しているようでした。そんな中、NTTのスリランカテレコムプロジェクトに参加させていただくことになり、協力隊の活動を終えてから、わずか1年少しで再びスリランカに赴くことになりました。ボランティアのときとは全く異なった環境、立場で仕事をすることになりましたが、協力隊で得た経験を活かし、自身の業務を遂行できました。オフの時に、活動していた村を訪ね、村人たちと再会を果たすことができました。当時、村にはまだ電話がなく、事前の連絡なしに訪れた私に村人たちは驚きつつも、大歓迎をしてくれましたが、それ以上に私を驚かせてくれたのが、パッチワーク商品の行商を村の女性たちが継続していたということです。中には、パッチワークの教室を自宅で開催している人もいました。私が2年間の活動を最後までやり遂げることができたのは、村人たちのサポートのおかげだったのですが、婦人たちは「ミス（私のことです）が教えてくれたことで私たちの生活が変わった。自分たちだけで継続することがミスへの恩返しだから」と言ってくれました。でも、彼女たちは、自分たちだけで売りに行くと買い叩かれてしまうため、利益を上げることが難しくなっていることを話してくれました。しかし、その時の私には、その深刻な問題をどうすることもできず、彼女たちの商品を小額の寄付と共に購入することしかできませんでした。

社会起業家を目指して

スリランカテレコムプロジェクトでは約2年半現地で仕事をさせていただきました。2000年の3月に日本に戻り、NTTコミュニケーションズで仕事をさせていただいておりましたが、同年の10月に退社しました。その後、民間企業やJICAの業務でスリランカ、ミャンマー、サモアなどを転々としてきましたが、協力隊での経験が自分の中でずっとくすぶっていたのか、改めて、国際貢献、海外事業などについて勉強をしたいと思い、2008年にシドニー大学の大学院に留学をしました。さまざまなカリキュラムがあったのですが、その中で私の目に留まったのが“Social Entrepreneurship”でした。まさに、ずっと探していたものがやっと見つかったときのような衝撃がありました。オーストラリアの社会起業家の方の講和や、社会的企業に関する文献などから、フェアトレードの詳細を知る機会を得、その中で、これこそ私が今後ライフワークとして関わっていくべきものという強いインスピレーションのようなものを感じました（！）。隊員時代にこのフェアトレードを知っていたら、村の婦人たちの活動も、もっと違ったものになっていただろうと思うと、これはやるしかないという気持ちになりました。ただ、調べていくにつれて、日本のフェアトレードが欧米のそれとは異なった仕組みになっていること、またフェアトレードの普及が一向に進んでいないこともわか

り、不安も募ってきました。そんな状況でしたが、私の性格でしょうか、「やってみなければわからない。走りながら考えていこう」と、いつもの直感的発想で、どんどん準備を進め、日本に帰国してから半年後の、この7月に小さなフェアトレードの店を開けることができました。

開店して1ヶ月



わずか 15 平米ほどの店舗に、南西アジア、アフリカ、中南米のフェアトレード生産者たちが手仕事で作ってくれた商品が並んでいます。広告、宣伝など全くしていませんが、それでも通りがかりの方や、フェアトレードをサポートして下さる方が訪れてくれます。開店からわずか1ヶ月ですが、2度、3度と訪れて下さる方もいらっしゃいます。また、お客さまには商品を購入していただいて、その上、クッキー、おそば、お漬物、ふりかけ、パン、店の飾り、お花、などなどいろいろなものをいただいています。多くの人から支えられていることを実感しています。ありがたい限りです。地元を20年も離れており、ネットワークがないことも開業するにあたっての不安材料の1つではありましたが、この数ヶ月で多くの知人・友人ができました。また海外の生産者の方から商品を購入した後もフォローの電話やメールをもらったり、新しい環境・仕事の中でネットワークが徐々にですが、できてきているようです。同時にフェアトレードを継続していくことの難しさ・課題も見えてきましたが、周りの方のサポートに応えられるよう、地元静岡からフェアトレードの重要性、途上国の生産者の方の声を日本の消費者の皆さんに発信していけたらと思っています。

最後に、宣伝になってしまいますが、お時間のあるときにでも当店のホームページをご覧ください。なっていたいただければ大変幸甚です。

<http://teebom-japan.com>

現地たより

SV 汪語粗生 シンガポールの粗生
フェアトレードショップ

サモアテレコム CEO 夫妻と JICA 研修生 OB
(筆者は後列右から2人目)

トンガに向けて成田を出発したのは2009年9月28日の18時30分でした。途中ニュージーランドで飛行機を乗り換え、トンガ・ヌクアロファ国際空港には、翌日の現地時間19時30分（日本時間15時30分）に到着しました。以来8ヶ月が経過し、日本との違いにやや戸惑いながらも、トンガでの生活をエンジョイ出来るようになりました。生活を通して見聞きした身の回りの情報をお伝えします。

1 トンガ人と言語

こちらに来て先ず強烈な印象を受けたのは大柄な人が多いことです。特にその傾向は女性に強く、なんでこんなに大柄で太った人が多いのか、今でも謎です。日本から派遣されている看護師さんの話では、生まれる赤ちゃんの平均体重は日本とそれほど違いはないということです。ですからその後の食生活、もしくは持って生まれた人種の違いからくるのかも知れません。ただし太りすぎは健康によくないということで、最近はエクササイズに励む人が増えており、夕方にはウォーキングしている人をよく見かけるようになりました。

トンガではトンガ語と英語が公用語です。南大洋州に属する国は基本的には現地語と英語を公用語としています。大部分の国がヨーロッパ各国の植民地になっていたことが大きく影響しているようです。その中でトンガは英国の保護領としての道を選び、この地域で唯一、植民地化されず独立を維持してきました。これがこの国の誇りです。

英語は小学生から学び始めます。隣に住む小学4年生の女の子は、トンガ語は勿論ですが英語も出来るので、私の英語勉強の格好な相手です。この国では英語教育が重視され、高校卒業後の就職や大学進学に英語の成績が大きく影響するようです。トンガの人口はここ数年10万人前後で推移していますが、このほぼ同数がニュージーランドやオーストラリアやフィジー、ハワイなどに出稼ぎに出ているため、英語が出来なければ国内でも海外でも安定した職を得るのは難しい、といった事情もあります。

2 トンガの産業

トンガにはこれといった製造業はありません。農産物の輸出、観光がおもな収入源で、身の回りの商品は大部分が輸入品です。雑貨、小物類はほとんどが中国からの輸入で中国人経営のファレコロアと呼ばれる小売店で売られています。農産物で日本と縁が深いのはカボチャです。一時期はトンガ輸出額の半分以上を占めるような時期もありましたが、現在はニュージーランドなど後発国に押され、ピーク時の数分の一にまで低下してしまいました。このため新たな輸出品の開拓が必要となり、日本からも農業関係のボランティアが二人派遣されてきています。

国家財政は海外からの出稼ぎ収入、国際支援(国連、オーストラリア、ニュージーランド、日本などからの無償支援)及び税金がほぼ均等の割合です。

3 職場の紹介

私が所属している情報通信省は、首相府にあった情報局と通信局の二つを母体に 2009年5月に設立されました。大臣は女性で、先日、創立1周年の記念に撮った写真がHPに掲載されました (<http://www.mic.gov.to>) .



トンガでは女性が家庭でも職場でも主導権を握っており、主要なポストに女性がつくのは別に珍しいことではありません。ある省ではCEO以外は全員女性でした。私はICT政策のアドバイザーとして派遣されましたが、元学校の先生が通信関係の技術者として一人いるだけです。ICTの重要性を考えて新しく省を設置したものの、人材難からICT担当は、現在のところ私一人といった状態です。

態です。

6月14日から19日まで大洋州の国々をメンバーとするICT国際会議がトンガで開催されました。参加国は23カ国に達し、加えて国際機関など12団体、会議参加者総数は約150人と、トンガで開催された国際会議としてはかなり大掛かりなものでした。会議では、共通のフレームワークに基づいて、今後各国が5年間で取り組むべきICT戦略が採択され共同宣言が発表されました。会議にあわせてアジア開発銀行やITUなどの国際団体からは事務局長などが出席し、基調講演や団体・組織の紹介が行われました。発表者は何れも中国人や韓国人で、日本人がこうした国際機関のポストについていないことを改めて思い知らされました。また自分自身、会議に参加しながら、英語力が足りないことを痛感させられた1週間でした。とは言え、国際会議の主催元として、また日本とはまったく条件の異なるこの地で、個人的には多くの経験をさせてもらいました。写真は、会議の合間のコーヒタイムで同僚のディレクターと一緒に撮った写真です。広場に張られたテントの下で、爽やかな風が吹いていました。

4 マーケットでの買い物

野菜類は市の中心部にあるマーケットで購入しております。トンガ人、中国人が商品を並べ販売していますが、トンガ人は野菜を余り食べないため、きゅうり、ホーレンソウ、玉ネギ、大根などは中国人経営の店から購入しております。魚は、近海で水揚げされたものを購入できます。日本でもお馴染みのカツオ、マグロもよく売られています。例えばマグロは漁場が近いので冷凍されず生で食べられ、しかもキロ当り1000円程度と安いのが魅力です。



写真は街の真ん中にある野菜市場で、大きなバスケットに山盛りになったキャッサバの販売風景です。イモ類はトンガの主食であり、週末ともなるとたくさんの買い物客で賑わいをみせます。

5 庭の果物

我が家の庭には、色々な花や木が植えられています。果物ではマンゴー、ブレッドフルーツやヤシなどです。今年はマンゴーも、ブレッドフルーツも収穫直前にレベル3のサイクロンが島を直撃し、枝が折れたり実が落下したりの被害を受けました。それでも食べきれないほどの収穫があり、隣近所にもおすそわけしました。マンゴーは小ぶりながら、よく実ったものは甘くて癖もなく、大人も子供も大好きです。ブレッドフルーツは、薄切りを油で揚げると、日本のポテトチップと同じようで大変香ばしく、おやつにもってこいの食べ物です。我が家にはありませんが、バナナ、パイナップルもおいしく、よく食べております。写真は我が家を外側の道路から撮ったもので、右にあるこんもりした木がマンゴー、左側奥の大きな木がブレッドフルーツです。家はさらにその奥にあります。



6 クリスマン国家

国王がクリスマンである影響からか、国民の90%以上はクリスマンとされています。結婚式、お葬式、朝晩のお祈りと年中賛美歌がどこからともなく流れてきます。きれいな声で最初は歌手でもいるのかなと思っていましたが、よく見れば一般の信者であり、透き通るような歌声に正直驚きました。

こちらは、日曜日は法律で休日とされていて、許可を得て営業しているレストラン、パン屋など一部を除き休業です。マーケット、一般の商店、ガリンスタド、バス、タクシー、空港など全て休みです。当初は大変戸惑いましたが、今では休みに合わせた生活で、不便ながらも慣れました。

日曜日は一家総出で教会に出かけ、多いところでは一日に3回もお祈りに行くそうで、とてもまねは出来ません。子供たちはこの時ばかりは、きれいに着飾って出かけます。好奇心から何回か教会を覗いたりしましたが、子供はいずれも同じ。大きなあくびをし、ぐずったりしていました。写真は街の真ん中にあるカトリック教会で、一階にはレストランもあり、メニューには日本のサシミもあります。

7 トンガの街を走る車

通勤途中にある私立の小学校へは各家庭とも車での送迎です。毎日学校周辺は渋滞し、警察官が出て、横断歩道で子供たちの誘導をしています。

市内を走る車はほとんど、日本の中古車で、○×消



防団とか△□施設など見覚えのある

名前が目にとまります。先日はなんとNTTマーク入りの車も走っていました。中古車なので修繕箇所のある車もよく見かけますが、さすがにフロントガラスが雲の巣状になった車には驚きました。わずかなひび割れの隙間を利用した運転で、本当に前が見えているのか他人事ながら心配になりました。窓ガラスがない車もよく見かけますが、器用にビニールでおおい、雨風をしのいでいるようです。このような車でも中を覗くと、子供が4～5人いて、トンガ人の子供の多さにも驚きます。ちなみに、乗り合いバス（マイクロバスで個人経営）は乗降用のドアを開けたまま、時にはガンガン音楽を流しながら走っています。写真は乗り合いバスのワンショットです。

8 トンガ人の大好きなスポーツ

なんと言ってもラグビーです。小学校の校庭でも小さな広場でもボールを蹴って遊んでいる子供たちを見かけます。外にいただけでも暑くて大変なのに、そのパワーには本当に驚きます。こちらの成功の方程式は、日本にスカウトされてラグビー留学し、日本の大学や社会人チームで活躍することです。日本へスカウトされたラグビー選手は大学を含めると数十人にのぼり、送り出したファミリーは多くの経済的恩恵を享受しています。ご存じかと思いますが、日本でナショナルチームのメンバーになっているトンガ人もいます。



グラウンドでは夜遅くまで、生徒の練習姿を目にしますが、大雨が降るとご覧の写真のように池に変身してしまいなんとも気の毒です。水鳥も泳ぎ回る光景を何度か見かけました。

今年11月には、民主化に向けた政治改革に基づく国会議員の選挙が予定されています。新年度が始まった7月（トンガの会計年度は7月から翌年6月）からは、選挙戦も本格的にスタートし、日本とはまた違った賑やかな年になりそうです。

海外派遣者への支援アクションプランについて

JOCV/SV サポート体制の確立に向けて

人材育成促進部長 山下 満男

前回の会報（No. 18号）の巻頭言において、顧問の石井氏から「これからの途上国（中進国）に対する支援について」という、途上国支援に対する提言がなされました。この提言を実現化すべく、「JOCV/SV サポート体制」を確立したいと考えています。JOCV/SV サポート体制の概要について説明するとともに、サポート要員として皆様のご協力を宜しくお願い致します。

JOCV/SV サポート体制は次のように考えています

1. サポートの目的

- (1) 海外で活動中の JOCV/SV がスムーズに活動出来るように技術的・管理的な側面からサポートし、活動内容の高度化/効率化を図る。
- (2) 派遣国が抱える電子政府、教育、医療、環境、防災分野等における ICT 用した問題解決に JOCV/SV の活動を通じて取り組んでいく。
- (3) JOCV/SV だけでは解決出来ない課題については、関係部署協力のもと、問題解決に取り組む

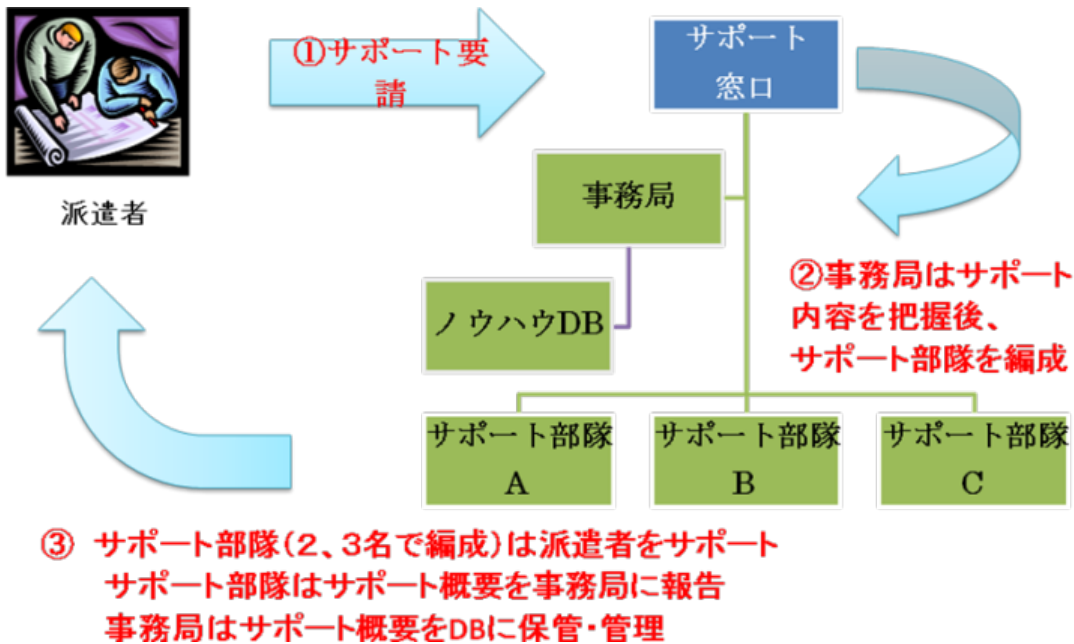
2. サポート対象

- (1) ICT 分野で活動している JOCV/SV 隊員
- (2) 電子政府、教育、医療、環境、防災分野等で、ICT を活用した問題解決に取り組んでいる JOCV/SV 隊員
- (3) サポート対象者から見返りを求める事や、義務を課する事は全くありません。本人から了解が得られれば、会報への投稿をお願いします。

3. サポート体制

- (1) 最初の全てのサポート要請は「サポート窓口（事務局）」で受け付けます。
- (2) 事務局はサポート内容を把握後、サポート部隊（サポート要員 2、3 名）を編成し、アサインします。
- (3) アサインされたサポート部隊（2、3 名で編成）は、直接サポート要請者と連絡をとり、原則として派遣者が帰国するまでサポートします。
- (4) サポート部隊はサポート概要を定期的/随時に、事務局に報告し、事務局はサポート概要を DB に保管・管理します。
- (5) サポート部隊だけでは解決出来ない課題については、事務局が中心となり、関係部署協力のもと、問題解決に取り組みます。

サポート体制を図で表すと、次のようになります。



4. サポート分野

サポートを実施する分野は次を考えています。

(1) ICT 技術

NGN、アクセス技術、IP 系ノード、リンク技術、携帯電話、通信エネルギー技術、IP ネットワークアプリケーション技術、画像通信技術、認証技術、設備運営保守、PC、SE、ソフトウェアの設計・開発・維持・管理、情報セキュリティ、データベース、放送技術等

(2) Application

e-Government、教育分野、医療分野、防災分野、環境分野等

(3) 共通基盤の整備、当該国の各種情報提供

法体制の整備、人材の育成、資金の確保、ICT マスタープランの作成等

(4) 関係機関の ICT 援助方針情報、各種提案書の作成

日本政府、JICA、JBIC、世界銀行、アジア開発銀行、APT等

(5) その他

語学（英語、スペイン語等）、マネジメント、プロジェクトマネジメント、各国現地情報等

5. サポート要員の募集

(1) 上記、サポート分野の一つでも経験、知識等があれば登録をお願いします。

(2) 事務局では、既にも上記サポート分野の情報を収集し、DB 化しています。必要に応じて、サポート要員は DB を活用出来ます。

(3) サポートは複数名で実施し、個人に過負荷がかからないよう配慮します。

(4) サポート要員を募集しますので、次により登録をお願いします。

➤ 氏名：氏名 フリガナ

- 連絡先：メールアドレス
- サポート分野：複数登録可
- その他：海外での活動経験、興味がある国名等

連絡先：人材育成促進部長 山下 満男

メールアドレス：yamashita@rcy-quartier1.gc-broad.net

会報お読みの方々へのお願い

本会の拡充と共に、会報の充実も計ろうといたしております。
それで会報をお読みになった皆様のご感想、ご意見、ご要望は、会報作成のみならず、
本会運営に当たっても大きな方向付けに役立ちます。どうぞ遠慮なくお送りいただきま
すようお願い申し上げます。

送付先は、編集部 加藤隆(kato2415@jasmine.ocn.ne.jp),または
村上勝臣(murakami.katsumi@mb.mni.ne.jp)までお寄せ下さい。

編集後記

編集を取り纏めをしております加藤です。

- ・ 本会の拡充を図る目的で、懸案でありました組織の名称変更および活動内容の充実を行います。それで会報の名称も新たにしました。従来以上に、皆様のご理解・ご支援をお願いします。
- ・ 改定の趣旨は巻頭言に石井顧問と加藤が述べておりますが、改定に当たりましては、事前に特別顧問・顧問・幹事・会員の皆様に意見紹介をさせていただきいたしまして、貴重なご意見を多数いただきそれらを取り入れております。皆様からいただきましたご意見は追って HP の「情報交換ボード」で紹介させていただきます。
また今回の改定に伴う HP の変更・充実は、山崎広報部長が中心となって検討をいたしております。

編集担当しております村上です。

- ・ 会員リレー寄稿で、JOCV 経験から、「フェアトレードショップ」オーナーに転身された今井奈保子さんから寄稿をいただきました。先般閉幕した全国高校野球選手権大会で興南高校の主将は優勝インタビューで「この優勝は興南高校だけでなく、沖縄県民が望んでいたのが嬉しい」と言っていました。今井さんのショップ開店は私にはこれに匹敵する快挙と感動しました。発展を祈念します。
- ・ 現地報告では、トンガから鈴木弘道さんの寄稿を頂きました。鈴木さんには出来ましたら、トンガの IT 技術関係のその後について、続編の寄稿をお願いしようと考えております。

- ・ IT 関係海外派遣技術者の支援体制の確立について、人材育成派遣部長の山下さんに進めていただいておりますが、関係のみなさまのご協力をお願いします。

- ・ (以上)

総編集長 : ICT 海外ボランティア会 事務局長 加藤隆

編集長 : ICT 海外ボランティア会 村上勝臣

発行 : ICT 海外ボランティア会

メール : sv@info.nttob.org